

# 近代史に見る 韓日関係と奉仕の理想

ひもじい人にパンをあげるのも、盲人たちに杖を贈るのも、みんな奉仕です。しかし、われわれロータリーが推進する奉仕の理想は、そこに善意と思いやりの心が宿っていなければなりません。

第3720地区(韓国)1992-93年度ガバナー 姜 順鉉  
カン スンヘン

もしも……

私は一九二七年一月一日、韓国の南部・釜山から西南約一五〇キロ地点にある、河東という所で生まれました。当時私は、韓国民の一人として生まれましたが、私の戸籍には「昭和二年」という日本の年号が記入されていました。それは、私が生まれる一七年前の一九一〇年、日本が韓国を併合して、私の国、韓国は、歴史の裏側に消え去ってしまったからであります。私は九歳のとき、普通学校(小学校)に入りましたが、尋常小学校、国民学校と、学校名が二回も変わる中で国民学校を卒業し、晋州師範学校に入りました。

当時、日本統治下にあった韓国の農村地域では、学校の先生と、面事務所(村役場)の書記、それから警察官駐在所の巡査などが、朝鮮人として可能な職業でありました。それで私は、先生になることに決め師範学校に入学したのです。一九三七年日中戦争が起こり、日本軍は破竹の勢いで、蒋介石軍を平定し、一九四一年二月八日には真珠湾を攻撃して、第二次世界大戦が始まりました。日本軍は南京陥落、上海陥落、シンガポール

陥落など連戦連勝して、大本営発表があるときには子どもたちは授業を休み、旗行列や夜の提灯行列に徴集され、「万歳！」を唱えながら戦勝を祝いました。

しかし戦況が反転し、硫黄島が取られ、サイパン島玉砕、そして沖繩までが占領されたときには、涙を流しながらも竹槍を作って、米軍の本土上陸に備えました。が、力尽きた日本軍は敗戦を認め、一九四五年八月一日、ポツダム宣言を受諾して、無条件降伏をしました。

よって韓国は、三六年間の植民地支配から解放され、独立国となりましたが、開族、独立の喜びもつかの間、米ソ両国の一方的な決定により三八度線が国土は分断され、民族は南北に分かれ、ついには六・二五戦争となり、共産主義と民主主義の代理戦を三年間も続けて数百万の死傷者を出し、今もなお休戦状態にあるのが、わが国韓国の痛ましい歴史であります。

人口一二〇〇万の首都ソウルの、ミサイルではなく、旧式大砲でも届くくらい、北方四〇キロ地点に、三八度線、いわゆる休戦ラインがあって、東西二八〇キロの国土分断線間には、一二〇万人の南北軍隊が最新の武器で武装し、六〇年間も対峙して、いつの日にか平和統一ができるかもしれない状態で、不安な毎日を暮らしているのです。

私は以前、沖繩を訪問したことがあります。そのとき案内してくださったガイドさんは、一日中戦跡地を回りながら説明し、夕方別れるときに「もしも日本が二か月くらい早く終戦を受け入れたなら、二十余万の島民と軍人たちが、

生き残ることができたものと思います」と言いながら涙ぐんでいました。

私は、ガイドさんが言った「もしも」という言葉を、一〇〇年前の日韓併合史に照らし合わせて考えてみたいと思います。

「もしも」一〇〇年前、日韓併合当時の日本統治者たちが帝国主義的野望を捨て、韓国を併合せず、近隣の独立国として認め、お互いに共存共栄をしていたなら、日中戦争はもちろん、太平洋戦争も避けることができ、日本国民全体が受けたあの悲惨な代価を払わなくてもよかったのではないか。

そしてまた、わが国韓国も三六六年間被圧迫民族として、あのような苦痛と苦難の歴史をたどらなくても済んだのではなかったか? と、つくづく考えるものであります。

われわれ日韓両国の近代史は、主従の関係でお互いに不幸な結果をもたらした記録でした。しかし今からの現代史は、一衣帯水の両岸にある友愛国として、共存共栄の歴史をつづつていかなければなりません。それを今、両国政府と民間団体が先立って実践しているのです。

二〇〇九年九月二〇日には、東京の表参道で朝鮮王宮の行幸行列が再現され、市民の皆さんから大歓迎を受けました。その開幕式に参席された鳩山幸首相夫人は祝辞の中で「今後とも、日韓関係が前向きに仲良く展開していくよう力を添えたい」と希望を述べられました。韓国語「カムサハムニダ」であいさつの言葉が終わったときには、テレビで中継を見ていた韓国の市民たちが、熱烈な拍手を送りました。



同じころ、アメリカ・ニューヨークの日韓兩國の首脳会談の場で、韓国の李明博大統領が、鳩山首相夫人が東京の韓日友好交流会の開幕式場で述べられた祝辞の言葉に対し、謝辞を述べると、鳩山首相は「韓国では、私よりも幸のほうもっと人気が高いと聞いています」と答へ、両首脳はもう一度固い握手を交わしたとマスコミは伝えています。

### 善意と

### 思いやりの心が宿る奉仕

われわれ韓日兩國のロータリーも、既に三十九年前から「Be a friend 友達になろう」というロータリー精神で、日韓兩國の友好交流を實踐してきました。活字からなる外交文書、これは当事国間の利害関係がイコールになるときに限って存続するものであります。しかし、われわれロータリーが志向する奉仕の理想は、永遠かつ無窮なるものであります。

ロータリアンの皆さん！われわれロータリーが至上の価値とする奉仕とは何でしょうか？辞書ではいろいろと説明していますが、私は「奉仕とは、社会と恵まれない人たちのために自分の心と、体と、物質を、施す行為である」と定義します。心とは善意を意味し、体は実践することであり、いくら多くの物質を施しても、そこに善意と思いやりの心がプラスされていないと、それは真なる奉仕ではありません。

クリスマスや年末年始になると、いろいろな団体が老人ホームや児童養護施設などの福祉施設を訪ね、奉仕活動をしていきます。このとき、写真撮影、お菓子やおもちゃなどを配ってあげ、身の不自由な老人たちを寝床から抱き起こし、準備してきたシャツや着物などに着替えさせてあげる人もおられます。

子どもたちや老人ホームに慰問品を配る前者の行為も、もちろん奉仕です。しかし、われわれロータリアンが追求する奉仕の理想は、後者に属します。父母の愛に飢えた子どもたちを抱き上げ、ほおをすり合せて愛情を分かち与え、肉親から見放された老人たちを善意をもって介護してあげれば、施す者の慈愛の心が伝わるものです。

ノーベル平和賞を受賞したマザー・テレサも、「どれだけたくさんのもを与えるかではない。大事なのは、どれだけ満ちあふれる善意と思いやりの心を与えるかである」と論じています。われわれロータリアンの基本法則である、ロータリアンの綱領でも、三か所で奉仕の理想をうながしています。

その一つは、綱領の前文で「ロータリーの綱領は、有益な事業の基礎として奉仕の理想を鼓舞し、これを育成し、特に次の各項を鼓舞、育成することにある」とし、その二つ目は、綱領第三の社会奉仕部門で「ロータリアンすべてが、その個人生活、事業生活および社会生活に常に奉仕の理想を適用すること」としています。そして三番目は、綱領第四の国際奉仕部門で

### 勇氣ある先生の教訓

ここで私は、善意と思いやりの心がこもったたとえ話を一つ紹介いたします。

今を去る六九年前のことでもあります。一九四〇年四月、韓国の南部・良甫という小さな農村の小学校に、鈴木幸男という若い日本人の先生が赴任してきて五年生を担任しました。

当時韓国では、内鮮一体を唱え、創氏改名をして名前を日本式に変え、学校内では日本語を常用し、朝鮮語を使えば体罰を与えることになっていました。

ある日教室の中で、AとBの児童がけんかをしていました。Bから不意打ちをくらったAは、くやしさをあまり、朝鮮語でどなりながらBをなぐり返しました。Bは教室に入ってきた先生に、Aが朝鮮語を使ったことを告げ口しました。先生は、Aをきびしく叱り、放課後教室に残るよう命令しました。

授業が終わってAは、体罰の怖さにおろおろしながら、先生を待っていました。やがて教室

設を訪問し、奉仕活動をしています。このとき、準備してきた品を代表者に差し上げ、写真を撮って、さっさと帰っていく人がいます。

しかしその中には、父母のない子どもたちをいたわり、お菓子やおもちゃなどを配ってあげ、身の不自由な老人たちを寝床から抱き起こし、準備してきたシャツや着物などに着替えさせてあげる人もおられます。

子どもたちや老人ホームに慰問品を配る前者の行為も、もちろん奉仕です。しかし、われわれロータリアンが追求する奉仕の理想は、後者に属します。父母の愛に飢えた子どもたちを抱き上げ、ほおをすり合せて愛情を分かち与え、肉親から見放された老人たちを善意をもって介護してあげれば、施す者の慈愛の心が伝わるものです。

ノーベル平和賞を受賞したマザー・テレサも、「どれだけたくさんのもを与えるかではない。大事なのは、どれだけ満ちあふれる善意と思いやりの心を与えるかである」と論じています。われわれロータリアンの基本法則である、ロータリアンの綱領でも、三か所で奉仕の理想をうながしています。

その一つは、綱領の前文で「ロータリーの綱領は、有益な事業の基礎として奉仕の理想を鼓舞し、これを育成し、特に次の各項を鼓舞、育成することにある」とし、その二つ目は、綱領第三の社会奉仕部門で「ロータリアンすべてが、その個人生活、事業生活および社会生活に常に奉仕の理想を適用すること」としています。そして三番目は、綱領第四の国際奉仕部門で

に入ってきた先生は、「朝鮮語を使ってはならんという学校の規則は、守らなければいけません」と注意し、「しかしA君、お前の国の言葉である朝鮮語を決して忘れるんではないぞ」と言い残して、体罰も与えずに、教室を出ていかれました。

当時の時局下においては、いくら日本人先生でも、よっぽど弟子を信じ愛さなければ、このような話ができない、勇氣ある先生の教訓でした。しかし当時のA少年は、このような鈴木先生の、ほんとうに弟子を愛する善意と思いやりの心を知ることができませんでした。

会員の皆さん！六九年前のA少年こそ、今ここに立っている私であります。その後私は、年をとるにつれて、鈴木先生の教師としての良心と善意、そして思いやりの心がはつきりとわかるようになりました。

それから五年後、一九四五年八月一日、第二次世界大戦が終わり、日本の植民地支配から解放された朝鮮民族は、全国各地から「独立万歳！」を唱え、興奮し始めました。私は、先生

「奉仕の理想に結ばれた、事業と専門職務に携わる人の世界的親交によって、国際間の理解と親善と平和を推進すること」と強調しています。

あるロータリー指導者が言いました。彼がガバナーのとき、公式訪問先の宿所で、疲れをいやすためマッサージを受けながら「あなた、ロータリーを知っていますか？」とそのマッサージ師に聞くと、「はい、金持ちの紳士たちが集まって昼食を共にしながら、奉仕活動をしている団体だと聞いております。この前も、ロータリーから盲人用の杖を送って来ました。私には、各団体から送ってもらった杖がたくさんあります。しかしわれわれ目の見えない人たちには、それよりも、道路の交差点で戸惑っているとき、親切に手を取って安全に道を渡らせてくださる小学校の子どものほうが、もっとありがたいです」と答えました。

ひもじい人にパンをあげるのも、盲人たちに杖を贈るのも、みんな奉仕です。しかし、われわれロータリーが推進する奉仕の理想は、そこに善意と思いやりの心が宿っていなければなりません。

ロータリーの創始者ポール・ハリスは、ロータリーとは、誰かに何か良いことをしてあげるることによって得られる幸福であり、それによって世の中をより明るく美しいものにする運動である、と定義しています。

私がガバナーであった一九九二―九三年度の国際ロータリー(RI)会長は、クリフォード・ダクターマン氏で、彼のテーマは「まことの幸福は人助けから」でありました。人間各自が満

を守るために先生のところへかけつけ、三日間を先生とともに過ごしました。四日目の八月一九日、先生は多くの日本人と一緒に引き揚げていきました。

当時先生は、私の手を握り「姜君！君はもう独立国の国民となった。どうか君の国のため、立派な人になってくれ。そして、縁があれば、きつとまたもう一度会いましょうね」と涙を流しながら、引き揚げていかれました。

それから三十余年の歳月が流れ、一九七〇年代の中ごろ、私は記憶していた先生の住所に手紙を出しました。二か月ほどして届いた先生の手紙は、「姜君！生きていたね！ああ、良かった！」から始まり、先生は、終戦当時、二週間もかかって帰国したこと、今は小学校の校長を務めていること、手紙の住所が間違っていたので、日本全国を回って遅く着いたことなど、それは一メートルにも及ぶ長い巻き紙の手紙でした。

私はその夜、返事を書きましたが、三〇年も忘れていた日本語で手紙を書くのは、容易なこ

第三七二〇地区 (韓国) 姜 順鉉

一九二七年生まれ。


晋州師範学校卒業後、河東中学校教師、晋州法院調停委員などを  
経て、学校法人河東育英院理事長、(財)河東郡興学財団理事長。

一九七〇年 河東(ハドン)ロータリークラブ入会。

一九九二―九三年度 韓国・第三七二〇地区総裁(ガバナー)。

国際ロータリー(RI)会長代理を幾度も務める。

二〇〇九年 RI超我の奉仕賞受賞。



とではありませんでした。それで私は、日本語の勉強をやり直し、先生へ手紙を絶え間なく送り、また返事もいただきました。

それから数年後、一九七八年二月、私は五月に東京で開催されるロータリーの国際大会に参加して、先生宅を訪問しますとの手紙を送りました。すると三月の初めごろ、「姜君！生きて君に会えるとは夢のようだ。一日も早く会いたい。どうか元気な顔でやって来い」との返事が来しました。

私は初めて日本に来て東京大会に参加し、五月一八日の夜、東京のホテルから先生に電話をかけました。しばらくして「はい、鈴木です」と女性の声が聞こえました。もちろんそれは鈴木先生の奥さまでしたが、私はわかりません。

「先生、おりますか？」と聞きましたが、何も返事がありませんでした。「私、韓国から来た先生の弟子ですが」と言っても、奥さまは黙っていました。私は、少し不安な気がして「私、先生にお会いするため、今東京に来ています。先生いらつしやいませんか？」と催促しましたが、なおも沈黙の時間は続きました。しばらくして、受話器の向こうからすすり泣く声が流れてきました。やがて奥さまは涙にうるむ声で、先生がお亡くなりになったことを、告げてきました。

「あなたが来るのを、毎朝カレンダーを見ながら待っていましたのに、三月一〇日、学校の校長室で脳溢血で倒れ、他界した」とのことでした。瞬間、私は息がつまり、受話器を落としてしまいました。

翌日私は、千葉県長柄町にある先生のお宅を訪ねました。そこには先生の家族と親戚、そして村人など大勢の人たちが待っていました。仏壇の前に案内された私は、先生の写真の前に立ちました。

「姜君！一日も早く会いたい。どうか元気な顔でやって来い」と言われた先生は、何も言いませんでした。瞬間、私は「本当に先生はもう、この世にはいないんだな」と実感し、畳の上にはびざまずいて声を上げて泣きました。

会員の皆さん！私が所属している第三五九〇地区の河東ロータリークラブ（RC）は、三六年前の一九七三年五月三日、会津若松南RCと姉妹締結をしました。当時、会津若松南から、一九人の会員が河東までおいでになり、結縁調印式を盛大に挙行了しました。

当時は終戦後二八年、つまり韓国が日本から独立して三〇年に満たないときですから、韓国民の対日感情があまり良くない時期でありました。河東RCでは、事前に部民代表たちを招待して、両国クラブの結縁調印式は、一種の国際会台であることを説明し理解を求めて、式場の正面に両国の国旗を掲げ「君が代」を高らかに歌いながら、調印式は順調に進みました。

そのとき、会津若松南RCの国際奉仕委員長であった能川孝さんはいさつ途中、感極まって涙を流し、一時はあいさつの言葉もとぎれてしまいました。これを見て河東RCの会員はもちろん、同席していた来賓たちも、日本人の良心とロータリアンの善意を読み取り、会場の雰囲気は一変し、結縁式は難なく終わることが

できました。

会津若松南RCは、加藤清正に拉致され、熊本で名刹の高僧日通上人となった余大男公の生誕地が河東であることを知り、同地に顕彰碑を建立することを提案、両クラブで一九九八年一月二三日、五百余人が参加して盛大な除幕式を行いました。このロータリーの国際奉仕の理念と行動が河東の人たちの心に伝わり、対日感情も一段と良くなり友好的になっています。

「起きて半甕、寝て一甕、天下を取っても二合半」という言葉があります。織田信長が天下の統一を目前に口にした言葉で、現代を生きる私たちも、傾聴すべき名言であると思います。

そうだとすれば、まず国家は余力をもって弱小国（いわゆる発展途上国）を助け、共存共栄して世界の平和を図り、一人ひとりのロータリアンが個人としてでも、一日二合半以上の財産は自分の分を残して、社会と恵まれない人たちのために、善意と思いやりの心をもって分けてあげること、これが、われわれロータリーが追求する奉仕の理想でもあると、私は固く信じ、会員の皆さんのご同意を求めらるるものであります。

日本の地区大会に、記念講演の講師として参加し、六十余年の昔習った少しばかりの日本語で、果たしていかほど演題に近づくお話ができたものかと心配で、恐縮の至りであります。しかしこの会場の雰囲気、勝手ながら、どうか講師としての任務を果たすことができましたものと思ひ、皆さんのご好意を大切にもち帰り、韓国のロータリアンにお伝えしたいと思います。